

キャンパスの「痕跡（あと）」

キャンパスめぐり隊	布施 智子〔ふせ・ともこ〕
案内人紹介	同志社社史資料センター社史資料調査員

同志社スピリット・ウィークの恒例企画として続いている「キャンパスめぐり隊」というツアーであるが、今年度秋学期は、2018年11月2日金曜日の3講時に開催された。幸い、天気にも恵まれ、参加者21名とともに約1時間、今出川キャンパス内を歩いて巡った。今回のテーマは「キャンパスの『痕跡（あと）』」と題し、歴史ある今出川キャンパスに残る「痕跡」に焦点を当てて紹介した。

今出川キャンパスの歴史は同志社創立の翌年である1876（明治9）年から始まり、現在に至っている。しかし、その間に建築された建造物がすべて残っているわけではない。キャンパスの中心をなす重要文化財5棟が目玉だが、むしろそれは一部である。それら以外の建造物もこれまでに数多く建てられたが、解体されて、また新しい建造物が建てられ・・・と、いわばキャンパス内で「代謝」が繰り返されてきたのである。現在私たちは、すでに解体された建造物を建物として見ることはできないが、その「痕跡」をキャンパスの至るところに見ることができる。普段ひっそりとキャンパスの隅に佇んでいるそれらの「痕跡」も、もとは確かに同志社の歴史を刻んだ建造物であったということを、改めて感じてほしいというねらいで今回のテーマを設定したのである。

ツアーの順路は、同志社礼拝堂→大学図書館を1周→彰栄館→明徳館→クラーク記念館を1周する道のりで、今出川キャンパスの西から東まで、特にパーパスロード以外の裏道をカバーするように歩いた。周知のとおり、今出川キャンパスには重要文化財5棟をはじめとする歴史的建造物が数多く残され、見学者も絶えず、キャンパスの「顔」にもなっている。今回のツアーでは、そうした文化財建築物などの有名どころ以外にも目を向けてもらいたい、という思いで順路を設定した。ここでは、当日の内容の一部を紹介し、ツアーの報告としたい。

今出川キャンパスの成立

まず、同志社礼拝堂（重要文化財・1886年竣工）に集合し、今出川キャンパスの歴史について資料を用いて説明した。同志社が開校したのは、1875（明治8）年11月29日であるが、開校した場所は寺町丸太町上ルであった。もともと、京都大工頭の中井家の屋敷であったのが、明治維新前後には華族の高松保実の所有になっていたという。その屋敷の半分を新島襄が賃借して仮校舎とし、同志社英学校を開いたのである。この寺町丸太町が同志社発祥の地であり、現在は新島旧邸（新島襄と八重の私邸）が建っている場所にあたる。

今出川に移転したのは開校翌年の1876年9月のことである。今出川の敷地は、薩摩藩邸の敷地であった場所で、そのことを示す石碑が烏丸通に面した西門の外に建っている。薩摩藩邸であった敷地は、現在のキャンパスの一部にあたる。資料①の古地図でも「薩州屋敷」とあるのが確認できる。ここに同志社最初の専用校舎3棟（第一寮・第二寮・食堂）が建築されたのである。

新島はこの土地を同志社開校前の1875年6月に、すでに取得していた。開拓社名義で山本覚馬が所有しており、新島は山本からこの土地を購入したとも伝わるが、資料的な裏づけはまだ取れていない。この土地に、専用校舎の建築を始めたのが1876年6月、約3カ月の工期を経て、9月18日にキリスト教式による献堂式が挙行され、同志社の今出川における歩みが始まるのである。

資料②は、同志社に残る最古のキャンパスマップである。最初の専用校舎3棟のほか、第五寮まで整備され、レンガ建築が2棟（講堂＝現在の彰栄館・礼拝堂）建てられている。礼拝堂（2代目）と比べると小規模ではあるが、初代の礼拝堂である「旧礼拝堂」も中央南側に残る。

資料③は、資料②と同じ頃のキャンパスの様子を描いた銅版画である。簡素な柵の手前の道が石橋通を示す。白壁の2階建の建物が第一寮～第五寮。寮の手前右側に見える1階建の小さな建物が旧礼拝堂である。同志社礼拝堂以外は現存しない。

大学図書館（3代目）周辺～彰栄館～明徳館～クラーク記念館を歩く

同志社礼拝堂で、今出川キャンパスの前史から成立初期までの話をした後、最初に向かったのは、大学図書館である。現在の大学図書館は、同志社にとって3代目の図書館となる。地下2階、地上3階、塔屋1階の鉄筋コンクリート造りで、1973（昭和48）年2月1日に開館した。レンガ造りの歴史的建造物が並ぶキャンパスの中でも、斬新なデザインの建築で、1975（昭和50）年に建築業協会賞を受賞した。

同志社において、図書館は礼拝堂と並んで重視されている施設と言える。新島襄のメモの中にも、キリスト教と立派な教師と図書館の充実こそが、同志社のまことの光となるだろうと書かれたものが残っている。初代の図書館は、正門に入ってすぐの「有終館」で、1887（明治20）年に「書籍館（しょじゃくかん）」として開館式が行われた。1920（大正9）年に2代目の図書館（現在の啓真館）が竣工したので、図書館としての役目を終え、建物の名称も当時の総長であった海老名弾正によって「有終館」と名付けられた。

そして、現在の3代目の大学図書館に至るが、この建築にもなって、もともとここにあった3棟の木造校舎が姿を消した。自修館、聚芳館、啓真館である。今回のツアーでは、図書館を1周回って啓真館の遺構→大学院門→南壺寺の礎石→「一粒の麦」碑をそれぞれ説明したが、本稿では啓真館と聚芳館の「痕跡」を紹介したい。

図書館の西側の植え込みに、古めかしい木の看板と造作物が残っている。啓真館の館名板と屋根の破風の一部が保存されているのである。もともとここにあった啓真館は、写真③のような建物であった。和風の木造建築で、この辺りがもとは公家屋敷街であったことをよく示している。建物自体は、華族会館として1879（明治12）年に建てられた。華族会館は戦後、進駐軍に接収されるが、接収解除と同時に、建物自体は同志社と売買契約を結び、華族会館は油小路出水の現在地に移転した。同志社では建物取得のために募金を行って1500万円で購入し、「啓真館」と命名して大学院棟として使用した。今出川通側に啓真館の門が現存し、柱に「同志社大学大学院」の木製看板が今でも掛けられているのは、そうした経緯を示しているのである。

図書館の正面西側の植え込みに、「一粒の麦」と刻まれた石碑が建っている。この言葉の由来は「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」（ヨハネによる福音書12章24節）という聖書の一節である。この碑が何を記念しているのかというと、昔この場所にあった「同志社商業高等学校」という夜間高校である。1938（昭和23）年に開校した、4年制の定時制高校であったが、1976（昭和51）年に25回卒業生を送り出したのち、廃校となった。「商高」と呼ばれたこの学校が校舎として使用していた聚芳館が、この場所にあったのである。昼間は同志社高校が、夜間は商高が使っていた。開校当初、生徒の9割が昼間の仕事をもち「入学は易しく卒業は難しい」と言われていたようである。時代のおりを受けて学校の維持が難しくなり、閉校となったが、苦学した学校への思い入れの強かった卒業生たちの想いを汲んで、当時の上野直蔵総長がこの聖句を選んで記念碑にした。建碑にかかる費用は卒業生の募金による。

大学図書館の後は、彰栄館へ。彰栄館では従来の建築自体の説明ではなく、良心館のある北側壁に残された「痕跡」の説明を行った。1階西側の上げ下げ窓の間に、三角の小屋型にレンガの色が変わっている場所がある。これは、戦時下にあった「奉安庫」の名残である。奉安庫（奉安殿）は、戦前、学校に設けられた施設の名称で、御真影や教育勅語を保管するために作られた。同志社では、1938（昭和13）年に同志社礼拝堂とハリス理化学館の間に独立した奉安殿が建てられたが、それまでは彰栄館北側の奉安庫に収められていたのである。

次は、同志社最初の鉄筋コンクリートによる大型建築物である明徳館前へ移動した。明徳館前の植え込みに小さな石碑があるのだが、刻字が消えかかっていて判読するのも難しいほどである。刻字がはっきりしている写真を資料として示しておきたい。この石碑は、明徳館の建築と併せて新制同志社大学のシンボルと言える。1948（昭和23）年4月、同志社大学は新制大学に移行したが、6学部（神・文・法・経。商・工は49年認可）と、1・2年次の全学生を包含する教養学部とから構成された。2年の教養課程、その後2年の専門課程という考え方があったが、この教養学部は1951（昭和26）年3月末で廃止され、短命に終わった。教養学部の解散を記念して、4本の記念植樹とともに建てられたのがこの石碑である。

最後に向かったのは、クラーク記念館周辺の「痕跡」である。クラーク記念館の正面に、牛の形をした石と、「大日如来」と刻字された柱石が建つ。キリスト教主義の学校に似つかわしくない置物と柱石であるが、これは1892年頃から同志社神学校内におかれた宗教博物館の蒐集品の一つであり、『明治二十五年度報告』によれば、宣教師のJ・T・ギューリックからの寄贈であるとの記録が残っている。宗教博物館は明治40年代には自然消滅してしまったようで、蒐集品は学内に散逸した。その他、クラーク記念館の南側と東側に、「第一寮」「第二寮」の石板がある。これらは、今出川キャンパスに最初に建築された木造の専用校舎2棟を記念する石板である。この2棟は、クラーク記念館の建築にもなって解体された。そして最後に、クラーク記念館の裏側にひっそりと建つ「出陣記念」の石碑とその傍らに植えられたオガタマノキについて紹介した。ちょうど本年は、1943（昭和18）年11月14日に学徒出陣壮行式が挙行されてから75周年という年にあたる。碑の傍らにあるオガタマノキ（榊の一種）は、出陣学徒たちが記念となる植樹を考えて植物園に相談し、その場で植物園の技師から薦められて掘り起こしてもらい、譲られたという樹である。

このように、キャンパスの西から東まで、また普段は通らない通路なども草をかき分けながら「痕跡」探しを行った。1時間を超える説明になってしまったが、参加者の皆さんが終始興味深く聞いてくださり、活発な質問も得られた。案内人は、これまでに何度か「キャンパスめぐり隊」の講師を務めたが、今回は学生の参加が多かったことが印象的であった。